

「都会っ子が茨城っ子になるまで」

かすみがうら市 田谷 幸子

祖父母の介護のため、都市部の学校から地方の学校に引っ越して5年が経ちました。家族の都合で仲の良い友達や大好きな学校とお別れし、茨城の学校に編入しました。父親は都市部で単身赴任となり、父親と会えるのも週末だけになりました。

引っ越してきた当初、子どもたちは生活のいろいろなところで躓きました。一番最初は祖父母の話す茨城弁が分からず、会話になりませんでした。二番目には、新しい学校での生活です。毎朝、「緊張する」と言いつつ昇降口に入っていました。三番目に、バツヤやカマキリなどいたるところに虫がいることに驚きました。そして、道を歩けば、知らない大人が「おはよう」、「がんばってるな」と声をかけてきて、どう答えていいか分からずにいました。色々な戸惑いを抱えながら、それでも、子どもたちは新しい生活に挑んでくれました。

5年たった今、子どもたちのイントネーションはすっかり地元の子のようになりました。祖父に分からない茨城弁は聞き返せるようになり、茨城弁マスターになってきました。バツヤやカマキリを「かわいい〜」と黄色い声をあげて捕まえて、頭をなでています。登下校で出会う大人の挨拶には「はい」と大きな声で返しています。そして、帰宅すると、「どこそこで声をかけられたけど誰だろう？」と祖父に尋ね、「あ〜あそこのおじちゃんか。」と言っています。自分が地域の大人に見守られていることを感じているようです。

得に、登下校途中にある畑や田んぼ、工場で働いている人とは顔見知りになり、声をかけられると立ち話をしたり、野菜をおすそ分けしていただいたりしています。我が家の家庭菜園で実った野菜や週末に家族で作ったお菓子を、自分から持って行ったりもします。そうすると、また何かいただいたりもします。都市部にいるときは、知らない人に声をかけられることは危ないことと学校からも親からも教えられてきたため、今の近所の人との何気ない日常の光景は不思議に感じます。

親である私もまた、地域の人たちに見守られています。手作りのお惣菜をいただいたり、子どもが体調を崩したときは「様子はどうだ？」と声をかけてくれます。子育てに行き詰まった時、祖父母は「そういうこともある」「なにしてもかわいい子だ」と私の気持ちを楽にしてくれます。地域の人々も「いい子だよ〜」「うちの子にしちゃいたいくらいだ」と言ってくれます。そのたびに、私は、子どもたちが生まれたとき、どんなにうれしかったか、なにをしてもかわいいと感じたことを思い出し、子どもがここにいるだけで大切な存在であることをかみしめています。

忙しい毎日の中で、私はどれだけ子どもに愛情を伝えられているだろうか、温かい眼差しを注いでいるだろうかと不安になることがあります。しかし、親である私だけが子育てをするのではなく、祖父母や地域の人々が「家族」となって、子どもを囲む温かい輪を広げてくれています。日常の小さな関わりが、子どもの心にたくさんの種を蒔き、この5年の間に

次々と花を咲かせてくれていると私は実感しています。子どもたちは、「この地域（社会）の一員である」と実感しています。また、私に依存しきった生活から、「何か困ったことがあったら〇〇さんちか△△さんち、□□さんちに助けを求めればいいんだ」と具体的に言える環境は、子どもに大きな安心をもたらしていると思います。

親である私は、ともすれば学校の勉強や進路にばかり目が行きがちで、学力で子どもを判断してしまうことがあります。しかし、祖父母や地域の人々は、子どもそのものを観ています。子どもが自らのアイデンティティを形成するとき、地域の人々や祖父母、そして茨城弁を含む文化や生き物たちと触れ合う自然は、子どものアイデンティティの一部となっていくでしょう。親からの影響だけでなく、様々な人、モノ、コトから影響を受けて育つ彼らは、どのような成長をしていくのか。人生の岐路でどんな選択をするのか。私には推測ができません。ただ、一つ言えるのは、それを楽しみにすることができる自分がいるということです。

子どもが育つ多世代家族と地域の仲間は、私にとっても、親である「私」が育つ大切な家族であり、仲間です。これまでの5年間、私が気づかないうちに、私に寄り添ってくれ、支えてくれたことに感謝しながら、これからの5年間は、祖父母や地域の仲間に感謝を伝えていけるようになりたい、私も成長したいと思っています。